

# Lorraine Hansberry, *A Raisin in the Sun*に みられるbe動詞の非標準形式について ——テキスト素材を用いた実証的言語研究の一例——\*

猪 熊 作 巳

## 0 本稿の目標とその背景

本稿は20世紀アメリカの黒人女性作家Lorraine Hansberry(1930-1965)による戯曲*A Raisin in the Sun*(1959/2004)を題材とし、そこにみられる非標準的な言語形式、いわゆる黒人英語(Black English)あるいはアフリカ系アメリカ人口語英語(African-American Vernacular English, AAVE)について実証的考察を加えていく。言語変種には音声や文法、談話など、さまざまな次元が存在するが、ここではその文法的次元に目を向け、特にbe動詞の変異パターンに注目していくこととする。

英語に限らず、日本にいながら外国語の研究をおこなう際に、学部生のような初学者にとって最大のハードルになるのはデータの収集であろう。考えられる手法としては、知人へのインタビューや大規模アンケート、あるいはインターネットやTV、コーパスなどを利用して1次データを収集したり、あるいは他の研究者による論文や報告などの2次データを利用したりすることであるが、前者の場合はそもそもそのような1次データへのアクセスが限られていることが多い。後者の場合は、その研究者の分析的視点の影響を受けていることも多く、包括的なデータ収集は困難であり、特に非標準形式や口語、流行語などに関する情報は非母語話者にとってアプローチの難しいトピックである。一方で、標準形式を対象とした分析をおこなうためにはこれまでに蓄積された膨大な量の先行研究をカバーする必

要があり、そのうえでオリジナリティのある研究を進めることは、現実的ではない部分もある。

結果として、初学者は概論や講義などの授業、あるいは入門書や概説書を通じて得た知識への興味と、それを自分の研究題材として実行に移す作業の困難さのあいだにある大きなギャップに立ち尽くすことになる。例えばアメリカ英語の方言に興味を抱いた学生が、いざ自身の卒業研究でそれに取り組もうと思っても、1次データへのアクセスが限られ、その一方、先行研究を通して2次データを収集しようとする、その内容の専門性や理論的分析の抽象性に打ちのめされる、といった具合である。

本稿はこのギャップを埋めるべく、文字化されたテキストを研究対象として、理論的前提に過度に依存することなく、地に足のついた実証的考察をおこなう方法の一例を示すことを目標とする。その意味において、本研究は理論的に目新しい分析を提案するものではないが、1次データの収集とそれに対する論理的説明を志向する、という点で、特に言語学に興味を持つ学部生に対して何かしらのヒントを提供できれば幸いである。

## 1 AAVEでみられるbe動詞の変異パターン：概説書を出発点として

英語の方言差、特に年齢層によるバリエーションやAAVEに代表される社会的方言差に関する関心は高いが、こういった話題に関して日本語で書かれた文献は非常に少ない。言語学の概説書などでの記述はその性格上、断片的な事実の紹介と、調査結果の簡単なまとめにとどまることがほとんどである。AAVEの文法的特徴を記述した部分をいくつかの英語学、社会言語学系の概説書からみてみよう。

岩田他（2013：51-67）はAAVEについて簡単に記述している。そのうち文法的特徴に関する箇所をまとめると（1）のようになる（岩田他2013：54-55）。

- (1) a. be動詞の脱落：特に名詞句・形容詞句・場所句が後続する場合

She Ø the first one started us off.

He Ø fast in everything he do.

We Ø on tape.

- b. be動詞の不変化用法

- c. 多重否定

They didn't never do nothing to nobody.

cf. SE: They didn't do anything to anybody.

- d. am notのain'tへの変異

- e. 標準英語とは異なるdoneやbeenの用法

We been lived here.

cf. SE: We have lived here.

You done done it.

cf. SE: We have done it.

- f. 三単現の-sの過剰矯正

I really likes going to school.

長谷川（2014：180-181）も同様に、AAVEの文法的特徴をいくつか挙げている。そのなかでbe動詞にかかわるものは（2）のとおりである（長谷川2014：181）。

- (2) a. 強勢が置かれず縮約されるような場合にbe動詞が省略される。

He (is) good at swimming.

Mary (is) loved by everybody.

- b. 習慣、未来を表すbe動詞は人称によって変化せず、beまたはbeesが使われる。

John be always quick in answering the question.

Tom often bees late for school.

- c. 過去形の否定にain'tがよく使われる。

I ain't go to school yesterday.

- d. 過去時制はしばしば現在時制で代用される。  
I go (went) shopping yesterday.
- e. 完了形は助動詞 have でなく been、done がしばしば代用される。  
Tom done finished the work. (つい最近の出来事の完了)  
Tom been finished the work. (過去の完了)

最後に東(2009: 75-83)によるAAVEの記述にも目を向けておこう。東はAAVEにおけるbe動詞の振る舞いについて、比較的紙面を割いて記述している(東2009: 78-79)。

- (3) a. 現在形：習慣、繰り返しを表すbe/bees  
They be slow all the time. (あいつらは、いつも遅い。)  
I see her when I bees on my way to school.  
(学校へ行く途中、あの子をみかける。)
- b. 現在形：習慣的でない行為、あるいはきまった状況を表すØ  
He Ø sick today. (あいつは今日、病気だ。)  
This Ø my mother. (こっちが、おふくろだ。)
- c. 未来形：be (willの脱落)  
She be there later. (彼女はあとでそこに行くだろう。)  
I be going home tomorrow. (明日、家に帰るだろう。)
- d. 過去形：主語の数に関係なく was  
He was my English teacher last year.  
They was acting up and going on.
- e. 完了：been (have/hadの脱落)  
He been there before.  
She been there and left before I even got there.

なおいずれの文献においても、ここで挙げたようなAAVEの特徴はアフリカ系アメリカ人に普遍的なものでもなければ排他的なものでもない、と

いう旨の断り書きがある点には注意を要する。つまり、すべてのアフリカ系話者の英語にこれらの特徴がみられるわけではなく、また、非アフリカ系の英語話者であってもこれらの特徴をみせるケースがある、ということである。さらに、——これはAAVE話者に限ったことではないが——同一の話者であっても、会話の状況に応じて言語使用域（レジスター）は変化する。ここには話者自身の社会階層や教養といった静的要因はもとより、対話者との親疎や会話のトピック、話者の気分といった動的な要因もかかわってくる<sup>1</sup>。

最初に述べたとおり、AAVEについて体系的に記述した文献のうち日本語で読めるものは限られているが、ここではディラード（1978）をとりあげてみよう。ディラード（1978：40-78）は黒人英語の文法構造について詳細な記述を提供している。そのなかでみつかるbe動詞の不変化形とゼロ形についての記述をまとめると、(4)、(5) のようになる（ディラード1978：48-49）<sup>2</sup>。

(4) 不変化のbe：

a. 常習的

He usually be busy.

b. 断続的

He sometimes be busy.

c. 未来

He be here soon.

(5) ゼロ形のbe：

a. 一時的

He busy right now.

b. 永久に変わらないとわかっているもの

He my brother.

ここまでとりあげた4つの記述を見比べてみると、すぐにいくつかの疑

間が浮かんでくる。まず(1d)と(2c)のあいだでは、一見したところ相矛盾する特徴づけがなされている。また、どの記述も断片的であり、それぞれの条件が交差した際にどのような結果が得られるのかについて判断ができない。例えば、be動詞が脱落する環境について、(1a)は後続範疇の観点から述べている一方、(2a)では強勢の有無という音韻的な条件が課されている。さらに(3b)や(5)では(非)習慣性や普遍性といった意味的条件が挙げられている。とすると、これらの条件が衝突する環境、例えば「形容詞句が後続し(1a)、常習的な意味を表す(4a)場合」に不変化のbeが現れるのか、あるいはゼロ形のbeが現れるのか、といった疑問が浮かんでくるのが自然だろう。いずれの疑問も、記述が断片的であること、および観点が一貫していないことに起因するものといって差し支えない。

次節以降では、データの網羅性と記述の一貫性という2点を重視しながら、AAVEのbe動詞が示す特徴を整理していく。といっても、もちろん現実の言語データを網羅することは原理的に不可能である。ここではアフリカ系アメリカ人作者によって書かれた、アフリカ系アメリカ人が登場する戯曲を1作とりあげ、そこで観察されるデータに集中することとする。

## 2 *A Raisin in the Sun*の発話にみられるbe動詞の出現パターン

### 2.1 考察対象テキストとデータ収集方法

本研究はアフリカ系アメリカ人女性作家Lorraine Hansberry(1930-1965)による戯曲*A Raisin in the Sun*(1959)を考察対象として扱う。選定にあたっては以下の点に留意した。第一に、AAVEの言語特徴に関心を寄せるからにはある程度まとまった数の発話例を収集する必要がある、一般に地の文の占める割合が高い小説作品よりも、セリフの占める割合の高い戯曲作品のほうが好都合である。また、フィクションを分析対象とする以上、ここで得られた結果をそのまま現実の言語特徴と同一視するわけにはいかないが、とはいえアフリカ系アメリカ人の作家によって書かれた、アフリカ系アメリカ人が発する発話を対象とすることで、その結果にも一定の言語学

的信頼性が得られるのではないかとの判断である<sup>3</sup>。

簡単に物語の大筋を紹介しておこう。この作品は1950年代前後のシカゴに住む、貧しい黒人家族の物語である。最近夫を亡くした、敬虔なクリスチャンであるLena “Mama” Younger(以降Mama)、その息子Walter Lee Youngerと妻Ruth Younger、WalterとRuthの息子Travis Younger、そして将来医者になることを目指し大学に通う、Walterの妹Beneatha Youngerの5人はシカゴ南部の小さなぼろアパートで暮らしている。30代の中年男性Walterは白人に仕える運転手として働き、Ruthも白人家庭の家政婦として働いているが、家族は貧困にあえいでいる。そんな折、Mamaの亡くなった夫の保険金が入ることになり、Walterはそれを元手に酒屋を開き、貧困から抜け出すことを夢見る。一方Mamaは保険金の一部をBeneathaの学費に、一部をWalterのビジネス資金に充てることを考える。そして残った資金を使って家族が住める小さな家を購入するが、その家は白人居住地区の物件だった。家族はその家に引っ越すことを決断するが、その矢先にこの地区の住民代表を名乗るKarl Lindnerがやってくる。Lindnerは、自分たちの居住地区に黒人家族が越してくることへの住民の懸念を伝え、その家を高額で買い取る代わりに引っ越しを断念するようYounger家に迫る。

この物語に登場する白人はLindnerのみである。また、Younger家のなかでも、それぞれのプロフィールは対照的である。高齢で教養はないが、信心深く、家族の精神的支柱であるMama、粗雑で教養はないが、家計を支え、Lindnerとの交渉もおこなうWalter、Travisを育てながらMamaとWalter、Beneathaの橋渡し役を務めるRuth、そして、高等教育を受け、向上心の強いBeneatha。彼らの発話を比較することで、さまざまな角度からAAVEの特徴が浮き彫りになることが期待される。

2.2節では、一定数の発話およびbe動詞の使用が認められるMama、Walter、Ruth、Beneathaの4名と、比較対象として白人であるLindnerに射程を絞り、be動詞の生起を観察・整理する<sup>4</sup>。標準英語においてbe動詞の生起が期待される箇所をすべて抽出し、実際の出現パターンと比較する。すべての生起例について、発話者と対話者をタグづけし、話者のプロフィール

ルおよび発話者—対話者の人間関係といった語用的・社会言語学的要因との関連を探る。

## 2.2 全面的な一般化と話者ごとのパターン：社会言語学的視点から

詳細な分析に入る前に、社会的要因、文法的要因を横断してすべての事例に共通して認められる一般化をとりあげておこう。

表1：話者ごとの非標準形式生起頻度

speaker	total #	a. nonfinite #	a-i. nonstd #	b. contract #	b-i. nonstd #	c. fin-noncont #	c. fin-noncont %	c-i. nonstd #	c-i. nonstd %
1. Walter	301	52	0	68	0	181	60.1%	91	50.3%
2. Mama	301	52	0	71	0	178	59.1%	102	57.3%
3. Ruth	189	42	0	46	0	101	53.4%	45	44.6%
4. Beneatha	190	23	0	63	0	104	54.7%	5	4.8%
5. Lindner	48	6	0	9	0	33	68.8%	0	0.0%

左列から順に、be 動詞（ゼロ形を含む）の生起総数（total #）、うち不定形の件数（a. nonfinite #）、不定形中の非標準形式件数（a-i. nonstd #）、定形中の縮約形（'m、's、're）の件数（b. contract #）、そして縮約形中の非標準形式件数（b-i. nonstd #）である。ここまでの結果から、強い一般化が得られる。

- (6) a. 不定形のbe 動詞では、標準形式からの逸脱はみられない。
- b. 定形be 動詞の生起例において、縮約形では標準形式からの逸脱はみられない。

すなわち、助動詞に後続する原形be、完了のbeen<sup>5</sup>、そして動名詞・現在分詞のbeingでは、発話者や対話者のような言語外的条件にかかわらず、また、その意味や後続範疇といった言語内的条件にかかわらず、非標準形式の生起は認められない。言い換えれば、(1a)、(2a)、(3b)、そして (5) に該



当するような環境であっても、不定形と縮約形が脱落することはない、また、複数から単数への水平化 (leveling) はしばしば観察される (例: *We is/was*, *They is/was*) もの、これが縮約形で生起することはない (*\*We's*, *\*They's*)、ということである。この一般化は、ここでとりあげている5名の発話だけでなく、他の人物による発話も含め、すべての事例に共通する特徴である。

この一般化を踏まえ、以降の議論では、(6a, b) の環境を除外して数値を提出していくこととする。表1の項目 c. fin-noncntr #は、定形のうち、縮約を受けていないbe動詞の生起数 ( $c = \text{total} - (a + b)$ ) を示し、c. fin-noncntr %はtotalに占めるこの形式の割合 ( $c \% = c/\text{total}$ ) を示す。最後に、c-i. nonstd #は非標準形式で生起したbe動詞の総数を示し、c-i. nonstd %はcの値に占めるc-iの割合 ( $\text{nonstd \%} = \text{nonstd}/\text{fin-noncntr}$ ) である。

次に話者間にみられる変異率の差に目を向けてみよう。表1のうち、上の4名 (1. Walterから4. Beneatha) が黒人、5. Lindnerが白人である。登場シーンが限られているためLindnerのbe動詞の使用数は他と比べて少ないが、それを差し引いても、非標準形式の生起数がゼロであることは自然な結果といえよう<sup>6</sup>。興味を引くのはBeneathaの発話にみられる非標準形式の生起率の低さ (4.8%) である。彼女はYounger家の一員ではあるが、前節でみたとおり、医者を目指して大学に通う、いわゆる「インテリ」である。彼女が高い教養を備えていることは劇中における彼女の言動や考え方にも反映されているが、全編を通してほぼまったくAAVEの言語特徴を示さない、という点にもっとも象徴的に示されている<sup>7,8</sup>。

Younger家の残りの3名についてはいずれもかなりの頻度で非標準形式の生起がみられる (Walter 50.3%, Mama 57.3%, Ruth 44.6%)。一般に知られている社会的要因との連関——例えば年齢層が下がるにつれて非標準率が下がる、男性よりも女性のほうが非標準率が下がる、など——についてはそれほど明確な差は認められない。

発話者と対話者の関係性についてもみてみよう。表2は縦軸を発話者 (speaker)、横軸を対話者 (addressee) とし、定形・非縮約形のbe動詞の

なかで非標準形式が現れた数とその率をまとめたものである。例えば、WalterはRuthに対する発話のなかで定形・非縮約形のbe動詞を68回使用し、そのうち35件が非標準形式であった、その率は51.5%である、と読む<sup>9</sup>。会話参加者同士の関係性（年齢の上下関係、性差、人種、親疎など）と言語表現の連関をみることを目的としたものだが、どの要因に関しても、あまり明確な関係性は見出せない。そのなかで1点興味深いのは、Walterの発話例において、Lindnerに対するケースのみが極端に非標準率が低い、という点だろうか。WalterはYounger家を代表してLindnerとの交渉にあたっており、その口調はかなりよそよそしく、ビジネスライクである。と同時に、Walterは黒人である自分と家族の貧困を憎み、そこから這い出すこと——より上位の社会階層にあがること——を目指しており、その象徴として登場するLindnerの用いる英語に自身の用いる英語を接近させている、と解釈することも可能かもしれない。

表2：発話者—対話者ペアごとの非標準形生起頻度

speaker	addressee						
	Walter	Ruth	Mama	Beneatha	Lindner	Others	total
Walter		35/68 51.5%	23/42 54.8%	14/26 53.8%	1/14 7.1%	23/41 56.1%	91/181 50.3%
Ruth	12/29 41.4%		17/40 42.5%	11/20 55%	1/1 100%	4/14 28.6%	45/101 44.6%
Mama	36/59 61.0%	26/51 51.0%		31/53 58.5%	3/4 75%	6/30 20.0%	102/178 57.3%
Beneatha	1/13 7.7%	3/29 10.3%	2/39 5.1%		0/3 0%	2/37 5.4%	5/104 4.8%

本節ではまず、不定形と縮約形は非標準形式が生起しない環境であることを指摘し、これらの環境を除外したうえで、発話者ごとの非標準形式使用頻度、および発話者—対話者ペアごとの非標準形式使用頻度の連関を観察した。次節では、Walter、Ruth、Mamaの3名のデータに集中し、非標準形式の生起パターンを文法的側面から考察する。

### 3 文法的要因

本節では非標準形式に対して文法的な側面から考察を加えていく。具体的には、まずすべてのbe動詞生起例を定性（時制の有無）、文の極性（肯定—否定）、後続範疇（名詞句、形容詞句、that節など）によってタグづけする。定形の場合はさらに、縮約の有無、主語の人称・数、および時制（現在—過去）によって分類し、これらの文法的要因とbe動詞の変異の相関をみる。本節では安定的に非標準形式の使用がみられるWalter、Ruth、Mamaの3名のデータに集中することとする。3者の差異を捨象し、総計したデータは表3のとおりである。総計791件のうち、不定形146件、縮約形185件を除いた460件について、その出現形式を文法的側面から分析していく。

表3：Walter + Mama + Ruthの総計

	#	%	standard #	standard %	nonstandard #	nonstandard %
Total	791	100.0%	553	69.9%	238	30.1%
nonfinite	146	18.5%	146	100.0%	0	0.0%
contraction	185	23.4%	184	100.0%	0	0.0%
<b>finite noncuntr</b>	<b>460</b>	<b>58.2%</b>	<b>222</b>	<b>48.3%</b>	<b>238</b>	<b>51.7%</b>

変異がみられた238件をその変異パターンから分類すると、(7) に示す通り、①主語の $\phi$ 素性（人称・数）との不一致、②否定でのain'tの使用、③脱落（ $\emptyset$ と表記）の3つに大別される。それぞれの代表例を（8）に挙げる。

- (7) a.  $\phi$  不一致： 37件  
 b. ain'tの使用： 85件  
 c. 脱落： 116件  
     i. 平叙文： 77件  
     ii. Wh疑問文： 18件  
     iii. YN疑問文： 21件

- (8) a. My — them steps is longer than they used to be. (Mama, p.89)  
 He and Bennie was at it again. (Ruth, p.39)  
 Maybe you was late yesterday. (Walter, p.128)
- b. I ain't meddling. (Mama, p.40)  
 Ain't nothing the matter with me. (Ruth, p.26)  
 And you — ain't you bitter, man? (Walter, p.85)
- c. i. You Ø almost thin as Travis. (Mama, p.41)  
 they Ø gone, child. (Ruth, p.44)  
 You Ø such a nice girl (Walter, p.37)
- ii. What time Ø the moving men due? (Mama, p.119)  
 How much Ø it going to cost? (Ruth, p.92)  
 What Ø you always excusing me for! (Walter, p.83)
- iii. Ø They downstairs? (Mama, p.146)  
 Ø You talking 'bout taking them people's money to keep us from  
 [...]? (Ruth, p.142)  
 All right, Ø you through? (Walter, p.118)

変異のパターンについては以降の議論でも繰り返し話題にあがるが、わかりやすい規則性を1つ指摘しておこう。(7a) に示した「 $\phi$  不一致」とは、主語の  $\phi$  素性から期待されるbe動詞の形式とは異なった形式が実現するケースだが、その異なり方には方向性がある。

- (9)  $\phi$  素性の不一致は、複数形式 (*are, aren't; were, weren't*) から単数形式 (*is, isn't; was, wasn't*) への変異に限られ、その逆はない。

この規則性は、本研究で確認された37件の  $\phi$  不一致ケースすべてにあてはまる。したがってこの現象は「 $\phi$  不一致」よりも「複数形式の単数形式への水平化」と呼ぶほうがより正確かもしれないが、記述の一貫性を考慮して、本稿では「 $\phi$  不一致」という呼び方で統一する。主語の単数・複数の

区別に関しては、当然2人称主語（you）の取り扱いが問題となるが、より詳しくは3.1.1節以降で議論する。

### 3.1 文法的環境との連関

この節では、主語のφ素性、時制、極性、be動詞の補部として生起する範疇の4つの文法項目とbe動詞の出現形の連関について、順を追ってみていく。最初の3項目をかけあわせることで、be動詞の変異パターンについてかなり詳細な記述が可能になることを示すと同時に、最後の項目、すなわち補部範疇との連関はそれほど明確には認められないことを指摘する。

#### 3.1.1 主語との連関

対象とする460件を、対応する主語の人称（1・2・3人称）と数（単数sg・複数pl）に応じて分類したものが表4である。主語名詞句の「重さ」の影響も考慮に入れるため（Wolfram 1974）、それぞれの主語タイプのうち、人称代名詞（I, you<sub>sg</sub>, he, she, it; we, you<sub>pl</sub>, they）が単体で生起しているケース（simple pronと表記）も抽出した。人称代名詞がandによって他の名詞句と並列されている場合（*me and Willy Harris*, *He and Bennie*など）はsimple pronにはカウントしていない。

表4：主語の人称・数と非標準形式の連関

Person	Number	Pron	total	standard	standard %	nonst #	nonst %
1			58	26	44.8%	32	55.2%
	sg		22	17	77.3%	5	22.7%
	pl		36	9	25.0%	27	75.0%
		うちsimple pron	33	9	27.3%	24	72.7%
2			107	15	14.0%	92	86.0%
	sg		99	15	15.2%	84	84.8%
	pl		8	0	0.0%	8	100.0%
		うちsimple pron	7	0	0.0%	7	100.0%
	3			295	181	61.4%	114
sg			246	171	69.5%	75	30.5%
		うちsimple pron	89	66	74.2%	23	25.8%
pl			49	10	20.4%	39	79.6%
		うちsimple pron	18	3	16.7%	15	83.3%
	sg 計		367	203	55.3%	164	44.7%
	pl 計		93	19	20.4%	74	79.6%

人称ごとにみると、1人称主語に呼応するケースは58件あり、うち非標準形式は32件で55.2%となっている。2人称主語では107件中92件（86.0%）と非常に高い非標準率が得られた。3人称主語は295件とともとも数が多かったが、うち非標準形式は114件（38.6%）と、非標準率は比較的低い。

単数主語と複数主語という軸に目を移すと、いずれの人称においても複数主語の場合の非標準率が顕著に高く、単数グループで44.7%（367件中164件）に対し、複数グループでは79.6%（93件中74件）となっている。特に2人称複数主語においては、総数が8件と少ないものの、非標準率は100%という極端な結果が得られた。

ただしここで注意すべきは、2人称単数主語においても非標準率が84.8%と非常に高い数値を出している点である<sup>10</sup>。詳細な変異パターンは後述するが、表4から読み取れることは、標準形式で*are/were*が期待される箇所において変異が顕著に高まっている、という事実である。言い換えれば、こ

の現象は人称や数といった統語的素性（あるいはその組み合わせ）によるものというよりも、*are/were*という語彙形式にみられる形態論的現象であることが示唆される<sup>11</sup>。

### 3.1.2 補部範疇との連関

後続範疇、より正確には当該のbe動詞が補部（complement）として取る範疇によるbe動詞の変異について明示的に言及しているのは岩田他（2013）のみであるが（(1a) 参照）、この観点から非標準形式の出現パターンを分類すると、表5のようになる。

表5：補部範疇との連関

	TOTAL	standard #	standard %	nonstandard #	nonstandard %
現在分詞（進行相）	120	34	28.3%	86	71.7%
過去分詞（受動態）	34	10	29.4%	24	70.6%
there 名詞句（存在文）	23	8	34.8%	15	65.2%
形容詞句	89	38	42.7%	51	57.3%
前置詞句	19	10	52.6%	9	47.4%
名詞句	117	75	64.1%	42	35.9%
省略	26	19	73.1%	7	26.9%
that 節・what 節	8	6	75.0%	2	25.0%
副詞句	20	18	90.0%	2	10.0%
不定詞	4	4	100.0%	0	0.0%

いくつかの項目について、注釈が必要だろう。「there 名詞句」は*there*によって導かれる存在文でbe動詞に後続する名詞句を指す。be動詞が標準形式であるか否かは、この名詞句との一致に照らして判断している。「省略」は文脈照応によって後続要素が削除された構造である。Yes/No疑問文を受けた回答*Yes, he is* \_\_.や付加疑問*wasn't he* \_\_?などがこれにあてはまる。Wh移動によって補部位置が空所となっているケース（*What is it what?*）は「省略」には分類せず、そのWh句自体の範疇に応じて分類している。「副詞句」にはもっぱら場所を表す*here*や*there*、およびそのWh疑問詞*where*が含ま

れるが、時を表す*then*、*when*もここに含めている。一方で、場所を表す*in this room*のような句は「前置詞句」に分類しているため、いわゆる「場所句」が前置詞句と副詞句にまたがっていることに注意してほしい。この点で、本稿の分類は(1a)で示した岩田他(2013)の分類とは異なる。

表5からは非標準形式の出現パターン((7)を参照)は読み取れないが、いずれにせよ、(1a)で挙げた岩田他(2013)の記述とはやや異なる印象を受ける。補部範疇に形容詞句、名詞句、前置詞句、副詞句が現れる環境よりもむしろ、現在・過去分詞が後続する環境のほうが非標準形式の出現は高い傾向がみてとれるが、後続範疇による頻度差に質的な違いを見出すことは難しい。

### 3.1.3 時制および極性との連関

続いて時制ごとの非標準形生起頻度をみてみよう(表6)。現在時制での非標準率(57.0%)が過去時制の非標準率(31.6%)の2倍弱の頻度となっているが、いずれの時制でも標準形式、非標準形式がともに認められ、決定的なパターンはみられない。

表6：時制との連関

	total #	standard #	standard %	nonstandard #	nonstandard %
present	365	157	43.0%	208	57.0%
past	95	65	68.4%	30	31.6%
total	460	222	48.3%	238	51.7%

極性に目を向けると(表7)、肯定形での非標準率は比較的低い(41.1%)一方で、否定形の非標準率は89.2%と極端に高い値を出している。

表7：極性との連関

	total #	standard #	standard %	nonstandard #	nonstandard %
affirmative	358	211	58.9%	147	41.1%
negative	102	11	10.8%	91	89.2%
total	460	222	48.3%	238	51.7%



3.1節では、主語の $\phi$ 素性、補部範疇、時制、極性の4つの文法項目から非標準形式の生起頻度を考察した。それぞれについて一定の傾向は認められるものの、いずれも確率論的なレベルを脱していない。次節では、これらの要因——特に $\phi$ 素性、時制、極性の3要因——を組み合わせることで、非標準形式の生起パターンについてかなり精度の高い記述が可能になることを示す。

### 3.2 記述精度の向上に向けて

本研究のまとめを兼ねて、3.1節でみた文法項目をかけあわせた結果をみてみよう。

#### 3.2.1 現在時制

表8は現在時制で生起するbe動詞を、主語の人称・数、および極性によって分類したものである。表8の左は生起件数、右はその割合である<sup>12</sup>。

表8：現在時制

総数	肯定		否定		比率	肯定		否定	
	std #	nonstd #	std #	nonstd #		std #	nonstd #	std #	nonstd #
1sg	9	0	0	5	1sg	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%
1pl	6	12	0	5	1pl	33.3%	66.7%	0.0%	100.0%
1人称計	<b>15</b>	<b>12</b>	<b>0</b>	<b>10</b>	1人称計	<b>55.6%</b>	<b>44.4%</b>	<b>0.0%</b>	<b>100.0%</b>
2sg	13	67	0	10	2sg	16.3%	83.8%	0.0%	100.0%
2pl	0	6	0	0	2pl	0.0%	100.0%	N/A	N/A
2人称計	<b>13</b>	<b>73</b>	<b>0</b>	<b>10</b>	2人称計	<b>15.1%</b>	<b>84.9%</b>	<b>0.0%</b>	<b>100.0%</b>
3sg	119	17	0	58	3sg	87.5%	12.5%	0.0%	100.0%
3pl	10	22	0	7	3pl	31.3%	68.8%	0.0%	100.0%
3人称計	<b>129</b>	<b>39</b>	<b>0</b>	<b>65</b>	3人称計	<b>76.8%</b>	<b>23.2%</b>	<b>0.0%</b>	<b>100.0%</b>

前節までの議論で、一連の文法的因子について、個別に非標準形式の頻度をみていた限りでは統計的一般化の域をこえることができなかったが、時制と極性をかけあわせることで強い一般化が得られることがみえてく

る。主語の人称・数にかかわらず、現在時制の否定形（1人称主語10件、2人称主語10件、3人称主語65件；計85件）では標準形式が1件も観察されず、すべてが非標準形式で生起している。

（10）現在時制の否定形は、常に非標準形式で実現する。

さらに、この85件の現在時制・否定形のbe動詞の変異パターンをみると、すべての事例が*ain't*への変異であることがわかる。したがって、（10）の一般化をさらに強め、（11）のように述べなおすことができる。主語のφ素性ごとの代表例も（12）に挙げておこう。

（11）現在時制の否定形は、主語の人称・数にかかわらず、常に*ain't*で実現する。

- （12） a. Now I ain't saying what I think. (Mama, p.56)  
 b. We ain't no business people, Ruth. (Mama, p.41)  
 c. You ain't old enough to marry nobody. (Mama, p.149)  
 d. Ain't she supposed to wear no pearls? (Walter, p.143)  
 e. Mama, there ain't no colored people living in Clybourne Park.  
 (Ruth, p.93)

肯定形では、否定形ほどクリアな分布はみられず、1人称単数および2人称複数を除いて確率論的な議論に戻るのだが、変異パターン——つまり、非標準形式が生起するとしたら、どのような形式で現れるか——については、かなりはっきりとした結果が得られる。

表9：主語の人称・数と変異パターンの相関

総数	肯定	
	脱落 $\emptyset$	$\phi$ 不一致
1sg	0	0
1pl	12	0
1人称計	12	0
2sg	67	0
2pl	6	0
2人称計	73	0
3sg	17	0
3pl	14	8
3人称計	31	8

1人称主語、2人称主語、および3人称単数主語に対して変異形が生起する場合(12+73+17=102件)は、すべてゼロ形が現れる。代表例は(13)のとおりである。

- (13) a. We  $\emptyset$  just plain working folks. (Mama, p.41)  
 b. You  $\emptyset$  right on time today. (Walter, p.126)  
 c.  $\emptyset$  You all sad? (Walter, p.105)  
 d.  $\emptyset$  Brother still worrying hisself sick about that money? (Mama, p.41)

3人称複数主語に対する変異では、ゼロ形が14件、 $\phi$  不一致形（すべて*is*で実現）が8件という内訳になっている。この実現形をもたらす要因ははっきりしないが、主語名詞句の統語的複雑性に相関が認められるかもしれない。(14)に示すとおり、主語が人称代名詞*they*の場合はすべての非標準形式でゼロ形が現れる一方、語彙名詞句の場合は $\phi$  不一致(*is*)の生起が8件、ゼロ形が2件となっている<sup>13</sup>。

- (14) a. 主語が*they*の場合  
 標準形式 (are).....3件  
 ゼロ形 ( $\emptyset$ ) .....12件  
 $\phi$  不一致形 (is) .....0件

## b. 主語が語彙名詞句の場合

標準形式 (are) .....7件

ゼロ形 (Ø) .....2件

φ 不一致形 (is) .....8件

## 3.2.2 過去時制

同様に、過去時制におけるbe動詞の生起パターンを、主語のφ素性および極性との関係からみてみよう。

表10：過去時制

	肯定		否定			肯定		否定	
総数	std #	nonstd #	std #	nonstd #	比率	std #	nonstd #	std #	nonstd #
1sg	7	0	1	0	1sg	100.0%	0.0%	100.0%	0.0%
1pl	3	8	0	2	1pl	27.3%	72.7%	0.0%	100.0%
1人称計	<b>10</b>	<b>8</b>	<b>1</b>	<b>2</b>	1人称計	<b>55.6%</b>	<b>44.4%</b>	<b>33.3%</b>	<b>66.7%</b>
2sg	1	5	1	2	2sg	16.7%	83.3%	33.3%	66.7%
2pl	0	2	0	0	2pl	0.0%	100.0%	N/A	N/A
2人称計	<b>1</b>	<b>7</b>	<b>1</b>	<b>2</b>	2人称計	<b>12.5%</b>	<b>87.5%</b>	<b>33.3%</b>	<b>66.7%</b>
3sg	43	0	9	0	3sg	100.0%	0.0%	100.0%	0.0%
3pl	0	8	0	2	3pl	0.0%	100.0%	0.0%	100.0%
3人称計	<b>43</b>	<b>8</b>	<b>9</b>	<b>2</b>	3人称計	<b>84.3%</b>	<b>15.7%</b>	<b>81.8%</b>	<b>18.2%</b>

それぞれの素性組み合わせの生起例総数が限られ、標準形式と非標準形式を明確に区別する基準はややみえにくいだが、変異のパターンは一貫している。肯定でみられる変異(計23件)はすべて*were*から*was*への変異であり、否定でみられる変異(計6件)はすべて*weren't*から*wasn't*への変異である。逆に言えば、過去時制のbe動詞が脱落する事例は1件も観察されず、また、否定形が*ain't*に変化する事例も観察されない。この結果は一見したところ、(2c)に挙げた長谷川(2014:181)の記述と対立するものである<sup>14</sup>。主語の複数性、より正確には標準英語で*were*あるいは*weren't*が期待される箇所に注目すると、以下のような一般化が得られるだろう。

## (15) 過去時制において、

- a. 標準形式
- was*
- (
- wasn't*
- ) に変異はみられない。

1人称単数および3人称単数主語の計60件は、すべて標準形式で生起。

- b. 標準形式
- were*
- (
- weren't*
- ) は、
- was*
- (
- wasn't*
- ) へ変異する。

1人称複数、2人称単数・複数、および3人称複数主語の計34件のうち、29件が*was* (*wasn't*) で生起。

(15a) に対する反例は観察されていない。(15b) に対する反例5件の内訳は、1人称複数（肯定）で*were*が3件、2人称単数（肯定）で*were*が1件、そして2人称単数（否定）で*weren't*が1件である<sup>15</sup>。

- (16) a. about the way we were going to live ... (Ruth, p.89)  
           we were so sure he'd be able to come in today (Ruth, p.104)  
           We were still full of that old-time stuff (Walter, p.142)  
       b. Where were you, Mama? (Walter, p.90)  
       c. If you weren't so fresh — (Ruth, p.47)

上記5件の発話が、MamaではなくWalterとRuthによるものであることを考えると、一種の世代方言、あるいは標準化の流れと解釈することもできるかもしれないが、件数が限られるため拙速な結論は控えるべきだろう。

## 3.3 不変化のbe

最後に、AAVEの代表的な文法特徴である「不変化のbe」について簡単に述べておこう（第1節の(2b)、(3a)、(4)を参照）。本研究において観察された、定形節に生起する*be*は以下の10例である。*Bees*の形式は観察されなかった。

- (17) a. What time you be home from school today? (Mama, p.47)

- b. [...] before you be spilling some of that stuff on that child!  
(Mama, p.55)
- c. She be all right.  
(Mama, p.60)
- d. I'm waiting to hear how you be your father's son.  
(Mama, p.75)
- e. Why this place be looking fine.  
(Mama, p.140)
- f. I be down directly.  
(Mama, p.150)
- g. [...] Travis be finished and Mr. Johnson'll be in there [...] (Ruth, p.25)
- h. [...] she be listening good and asking you questions [...] (Walter, p.33)
- i. [...] the initial investment on the place be 'bout thirty thousand, see.  
(Walter, p.33)
- j. That be ten thousand each.  
(Walter, p.33)

これらの事例を現在時制・不変化の*be*とみなすべきか、あるいは未来の助動詞*will*の脱落（(3c)を参照）とみなすべきかは、前後の文脈と文意を慎重に照らしあわす必要があるが、10例いずれに関しても、未来傾向の解釈——*will*の脱落——と明確な齟齬をきたすものではないだろう。そのため本研究ではこれらのケースを助動詞*will*の脱落とみなし、*be*動詞そのものの非標準形式には分類しなかった<sup>16</sup>。実例は割愛するが、過去分詞形の*been*の事例（(1e)、(2e)を参照）についても同様に、すべて完了の助動詞*have*の脱落として処理できると判断し、*be*動詞の非標準形式とはみなしていない。

#### 4 結論

本稿では、Lorraine Hansberryによる戯曲*A Raisin in the Sun*を題材に、その登場人物の発話にみられる*be*動詞の生起パターンを文法的側面から考察した。冒頭で述べた通り、言語変種のような問題は、初学者向けの概説書では断片的な記述にとどまり、その全貌がつかみにくいことがままある。本稿では考察対象とするテキストを絞って網羅的に調査する作業を通じ

て、言語研究の基礎となる、データの収集・整理・考察という流れを例示することができたのではと思う。言語変種の問題を取り扱う以上、傾向や統計といった確率論的な議論を伴うことは不可避だが、関連する文法事項を抽出し、それらの連関をつぶさに分析することで、言語表現の生起パターンを一定の確度で予測できることを示した。

言うまでもなく、本研究が対象とした言語データはあくまでフィクション内の発話であって、ここで得られた結果がそのまま現実の言語現象に適用される保証はまったくない。とはいえ、まず考察の俎上にあげるデータの外延を確定し、そこで得られた知見を足がかりに、より広範な、現実の言語データへと考察を進めるという手順は、少なくとも言語学的訓練を積むという目的にとって有用なものではなかろうか<sup>17</sup>。

#### 注

- ＊ 本稿は、2019年度前期に筆者が本務校にて担当した、英文学科3年次学生対象の必修科目「プレセミナー」でとりあげた内容を発展させたものである。個別に言及することはできないが、参加学生からの意見および期末レポートから着想を得た部分もある。ここにお礼申し上げる。不正確な記述や不十分な理解はすべて筆者の責任である。なお本研究の一部は科学研究費（若手B：17K18106）によっている。
- 1 こういった要因については東（2009）、岩田他（2013）およびそこに言及されている文献を参照のこと。
- 2 ただしこのまとめは、原著であるDillard（1972）の出版から翻訳（ディラード1978）の出版までの期間に出版されたFasold（1972）を反映させた訳注のなかにみつかため、正確には訳者の小西友七に帰されるべきものである。
- 3 本稿でみようとしている対象が、「作者Hansberryの用いる英語」ではなく「その登場人物の用いる英語」である、という点に注意。前者であれば、テキストのフィクション性にかかわらず、AAVE話者が用いる現実の言語データとして処理できるかもしれないが、フィクションのキャラクターが吐いた台詞を用いる以上、「人工性」の問題は不可避である。とはいえ以下でみるように、現実のAAVEについて知られている特徴の多くがこのアプローチでも確認されたことも事実である。理想的には、本稿で採用しているようなアプローチを

AAVEコーパスなどを用いて実際の言語データに適用する作業が必要となるが、それは本稿の目的を超えるものである。

- 4 Younger家にはTravisという子供もいるが、彼はまだ10歳程度であり、発話数も他の人物と比較して少ない（全発話ターン50件、be動詞使用数25件、うち非標準形式7件）ため、以降の議論から割愛する。
- 5 標準形式で*will be*や*have (has) been*が生起する箇所は、本研究では不定形としてカウントしている。これらの構文において*will*や*have*の脱落は観察されたが、これらの現象はbe動詞自体の変異とはみなさず、本稿の考察対象から外している。3.3節を参照のこと。将来的には、be動詞を含めた助動詞の要素一般に共通するAAVEの特徴として捉えるべき現象であると思われるが、これは今後の課題とする。なお(1e)や(2e)で指摘されている、標準英語とは異なる*been*の用法は、*A Raisin in the Sun*のなかには1件も観察されなかった。
- 6 もちろん、ヨーロッパ系英語話者が常に標準形式を用いるわけではないが、白人と黒人の対比という物語上の演出、また、LindnerはYounger家の人々とはまったく面識がない状態で、彼らに引越しを思いとどまらせるために訪問してきた、という状況を鑑みると、彼の発話にかなりフォーマルな特徴がみられることは予想できることである。
- 7 Beneathaの発話に観察された5つの非標準形式は以下のとおり。
  - (i) a. Ø You pregnant? (脱落: p.57)
  - b. What they think we Ø going to do --- eat 'em? (脱落: p.121)
  - c. Mama, Ø you going to take *that* to the new house? (脱落: p.121)
  - d. Everybody talking 'bout heaven ain't going there! (*ain't*: p.122)
  - e. You Ø with all your talk and dreams about Africa! (脱落: p.133)
 このなかでも、(i-d)はおどけた発話であり、意図的に英語を「崩して」いる雰囲気もある。*about*の語頭母音が脱落していることにも注意。(i-e)については一種の感嘆表現であり、そもそもbe動詞の脱落とみなすべきか吟味する余地があるかもしれない。
- 8 彼女が親しくしている2名の黒人男性（Joseph AsagaiとGeorge Murchison）の発話にも、やはりbe動詞の変異は認められない。
- 9 発話によっては複数の対話者を想定すべき事例もみられたため、1つの発話に対して複数の対話者をカウントしているケースもある。したがって対話者ごとの件数の合計と、表2の右端に記載のtotal件数が一致しないことに注意。
- 10 もちろん標準英語の2人称主語ではbe動詞の形態は単数・複数にかかわらず常に*are/were*であり、動詞形態のみでは区別ができないため発話の状況や後続する述語名詞句の数などから間接的に判断するしかない。
- 11 あるいは逆に、「単数の*you*」も統語的には複数素性を備えている、ととらえ、



表4のパターンはこの複数素性に起因する、と主張することも可能かもしれないが、この理論的問題は本稿の射程を大きく超えるため、ここでは脇におく。少なくとも述語名詞句との一致に関しては、*you*も単数・複数の区別がなされていると言わざるをえない。

(i) a. You are a good student.

b. ≠ You are good students.

12 表中N/Aは、その素性値を持つ事例——このケースでは2人称複数主語の否定形——が、テキスト中で1件も観察されなかったことを意味する。

13 3人称複数の語彙名詞句主語に対する現在形の生起例（計17件）は以下のとおりである。Be動詞は下線によって、対応する主語は四角囲みによって表示している。

(i) φ 不一致

a. Lord, some people I could name sure is tight-fisted! (Mama, p.67)

b. My --- them steps is longer than they used to be. (Mama, p.89)

c. You know how these young folks is nowadays, mister. (Mama, p.149)

d. Your eggs is getting cold! (Walter, p.34)

e. [...] and his eyes is always closed and he's all music [...] (Walter, p.106)

f. And things is going to be very different with us [...] (Walter, p.108)

g. [...], man, them takers is out there operating, just taking and taking.  
(Walter, p.142)

h. who decides which women is suppose to wear pearls in this world [...]

(Walter, p.143)

(ii) 脱落

a. I spec people ∅ going to always be drinking themselves some liquor.

(Ruth, p.42)

b. What time ∅ the moving men due?

(Mama, p.119)

(iii) 標準形式

a. There are some ideas we ain't going to have in this house.

(Mama, p.51)

b. There are colored men who do things.

(Ruth, p.34)

c. I mean sometimes people can do things so that things are better [...]

(Ruth, p.89)

d. [...] if the moving men are here --- LET'S GET THE HELL OUT OF  
HERE!

(Ruth, p.149)

e. [...] restaurants where them white boys are sitting back and [...]

(Walter, p.74)

f. The way things are with us [...]

(Walter, p.88)

g. “By the way, what are your views on civil rights down there?”

(Walter, p.113)

- (iii-g) はWalterが冗談めかして言った台詞（つまりメタな台詞）であるが、たとえこれを除いたうえで、本文中で議論した一連の文法事項、およびそれぞれの文の意味解釈（一時性、習慣性、普遍性など）を考慮に入れても、これらの生起パターンを十分に予測できる説明は現時点で持ち合わせていない。
- 14 ただし長谷川（2014：181）は一般動詞の例を挙げながら（2c）の特徴を紹介しており、本研究が対象としているbe動詞がそこに該当するのかについては不透明である。とはいえ、このような問題こそ、第1節で指摘した「記述の非網羅性」である。
- 15 （16c）については、仮定法過去として処理できるかもしれないが、本研究では仮定法については考察に入れていないため、今後の課題とする。
- 16 （17b）はいわゆる「条件・時間を表す副詞節」内に生起する、つまり「現在形のbe」にもみえるが、この文脈上習慣や繰り返しとして解釈することはできない：「坊や [Travis] の頭にそれ落としちゃうわよ！」。
- 17 本稿はこれまでにAAVEについてなされた言語学的研究にはほままったく言及していない。言語研究の第一歩目を歩むものにとっては、膨大で難解な先行研究を読むよりも、理論的先入観のない状態で地道な言語観察を積み重ねることのほうが有意義であると考えためである。AAVEへの言語学的アプローチに興味を抱いたものは、本研究の結果を念頭に、以下のような文献、およびそこで言及されている文献に進むとよい——ボー（1989）、Green（2009）、Labov（1972）、Rickford（1999）、Smitherman（1986）、Mufwene et al.（1998）。AAVEの特徴ならびにそれを取りまく社会状況について平易に書かれたものとしては、Rickford and Rickford（2000）、McWhorter（2017）などが読みやすい。

## 分析対象文献

Hansberry, Lorraine (2004) *A Raisin in the Sun*, Vintage.

## 参考文献

- 東照二（2009）『社会言語学入門＜改訂版＞ 生きた言葉のおもしろさに迫る』研究社。
- ボー, ジョン 著／東毅 訳（1989）『黒人の街言葉 その歴史、構造、そして存続』ニュー

カレント インターナショナル.

Dillard, J. L. (1972) *Black English: Its History and Usage in the United States*, Random House.

ディラード, J. L. 著／小西友七訳 (1978)『黒人の英語 その歴史と語法』研究社.

Fasold, R. W. (1972) *Tense Marking in Black English: A Linguistic and Social Analysis*, Center for Applied Linguistics.

Green, Lisa J. (2009) *African American English: A Linguistic Introduction*, Cambridge University Press.

長谷川瑞穂編著 (2014)『はじめての英語学 改訂版』研究社.

岩田祐子・重光由加・村田泰美 (2013)『概説 社会言語学』ひつじ書房.

Labov, William (1972) *Language in the Inner City: Studies in the Black English Vernacular*, University of Pennsylvania Press.

McWhorter, John (2017) *Talking Back, Talking Black: Truths about America's Lingua Franca*, Bellevue Literary Press.

Mufwene, Salikoko, John R. Rickford, Guy Bailey and John Baugh (eds.) (1998) *African-American English: Structure, History, and Use*, Routledge.

Rickford, John R. (1999) *African American Vernacular English*, Blackwell.

Rickford, John Russell and Russel John Rickford (2000) *Spoken Soul: The Story of Black English*, John Wiley.

Smitherman, Geneva (1986) *Talkin and Testifyin: The Language of Black America*, Wayne State University Press.

Wolfram, Walt (1974) "The Relationship of White Southern Speech to Vernacular Black English," *Language* 50 (3), 498-527.